

武蔵野市高齢者福祉計画・第8期介護保険事業計画策定委員会（第4回）会議要録

○ 日時	令和2年8月26日（水） 午後6時30分～午後8時25分
○ 場所	武蔵野市役所東棟6階601会議室
○ 出席委員	山井理恵（委員長）、久留善武（副委員長）、那須一郎、谷口勝哉、佐藤博之、武田美智代、竹森利恵、川鍋和代、磯川和夫、島田豊文、富岡昌世
○ 欠席委員	なし
○ 事務局	健康福祉部長、高齢者支援課長、相談支援担当課長、地域支援課長、障害者福祉課長、福祉公社常務他

1 開会

2 議事

（1）第3回策定委員会資料に係る意見・質問に対する回答【資料1】

【委員】 資料1の13番、論点0（ウィズコロナ、ポストコロナに対する取り組み）に関して、前回も提示したが、コロナウイルス感染症の拡大がいつ収束するか分からないため、それを考慮しつつ見直し・検討を進めるべきでないか。

端的に言えば、コロナ禍におけるフレイルや孤独死などの実態の検証を試みる必要があるのではないかと。そのようなことをして今後のやり方としてはどうすべきか検討する必要がある。

また、仮に新型コロナウイルスで無症状の感染者が出たときの対応として、自宅待機するのか、別の場所で待機するのか、病院に入るのかということまで、対応策を用意しておいたほうがいいのではないかと。

【委員】 コロナウイルス感染症に関しては、まず医師会のほうでどのように対応しているかといえば、5月から市役所と、それから市内の医療機関で共同してPCR検査センターを立ち上げ、かかりつけ医の先生が、検査が必要と判断した方に対して検査を行うことにしている。また、唾液式のPCR検査を手上げた医療機関で開始することになったため、市役所と協働して、どこの医療機関で実施するかなどを公開する予定である。また、多摩地区における軽症者の宿泊施設は八王子のホテルになっており、医師会の会員である医師が交代で行って診療している。

ただし、実際には今後の予想が難しく、先ほど挙げたホテルも6月ぐらいには空室が多かったのが、7月はもう満床になった。資料2の36ページに、アンケートの自由記載での回答にもある通り、深刻に高齢者が悩み、不安を抱えていることが分かる。そのため、約半年単位の方針で、市役所でシナリオを作成し、具体的なことを決めていけなければならないと考えている。

【委員】 歯科医師会では、こちらの委員会に関わるものとしては2事業を実施している。

まず1つ目は、健康課からの委託事業で「歯つらつ健康教室」を行っている。平成19年4月から実施しており、介護予防事業の一環として口腔機能向上のプログラムを設けている。口腔機能検査、咬合力検査、咀嚼機能検査を行い、口腔周囲機能の向上、嚥下機能の向上を目的としたプログラムと栄養指導、口腔ケア指導を行う。実施後には再度検査を行い、全6回の教室で年3回、保健センター、ゼロワンホール、スイングホール等々の各所で実施している。今後のコロナ禍でどのようにしていくつかについては、ただ口腔機能の向上だけでなく全身の機能も連動しているという考えから、全身の機能向上を目的として既存の介護予防教室と連携したいと考えている。そのために、具体的には各教室のスタンプカードの導入や、各教室のプログラムが介護予防のために連動している内容について考えていく必要がある。口腔機能、嚥下機能のみならず、全身のフレイルの予防として実施していきたい。

もう1つは、平成29年4月より、高齢者支援課からの委託事業で「摂食嚥下支援事業」を行っている。吉祥寺ナーシングホームを軸として、ゆとりえ、武蔵野館、とらいふ武蔵野を加えた市内4施設で月1回カンファレンスを行っている。事前カンファレンス、ミールラウンド、そして事後カンファレンスを行って評価していく仕組みである。

しかしながら、現在新型コロナウイルスの関係で2施設が事業を中止している。嚥下に関して問題がある入所者もみられる中、われわれの専門的な評価と指導はなく、新型コロナウイルスという感染以外にも窒息や誤嚥性肺炎などで生命の危機にさらされていると言っても過言ではない。今後の対応として、具体的にはリモートミールラウンドというものを検討している。通信機器や嚥下補助機器、専門的な施設職員の教育も必要であり、すぐにというわけにはいかないが、今後そのようなことも検討していくべきではないかと当会としては考えている。

【委員】 薬剤師会として特にコロナに対しての独自の活動というのは行ってはいないが、外出を控えている方に対しての薬をお持ちしたり、郵送したりするという対応を検討している状況である。

【委員長】 新型コロナウイルスの影響で、様々なサービスが中止、縮小になったため、恐らくそのことで例えばフレイルのリスクも上がっている。その中でまた介護予防を再開するにはどのようにするべきか、特にそれは要介護度によってできることも違ってくるため、主にケアマネジャーの方や、そういう在宅サービスを提供している委員の方で、今回のコロナの影響や今後の介護予防の在り方などについてご意見があればいただきたい。

【委員】 利用者の中で、このコロナの感染予防のためにサービスの利用を控えるというのは実際に起こっており、緊急事態宣言が出ていたときよりも、むしろ2020年8月現在のほうが、いつどこで感染するか分からないという危機感が、利用者や我々にもある。デイサービスなどは始まってはいるが、予防を徹底しているものの、回数を減らし、利用を控えている。武蔵野市はひとり暮らしの方が非常に多いので、コミ

コミュニケーションも少なく、精神的にも内向きになっている。

実際、特に高齢者の方なので外に買い物に行くことさえ控えているという方も多いので、この後の、これから先の要介護度や生活面にも影響があると考えている。

【委員】 デイサービスの送り出しとかお迎えは訪問介護が担うところがあるが、デイサービスに行くことが出来なくなった方で、もう何カ月もずっと引きこもり状態の方もいると聞いている。

われわれとしては、コロナウイルス感染症以上に閉じこもりによって認知症が進行し、精神的な病気に罹ることが非常に心配である。さらに今年の8月の天候は猛暑なので、熱中症も危惧される。エアコンを付けるようにとスタッフが促しているが、高齢の方はエアコンの利用を拒否される方が多いため、家の中にある危険性というのはより一層注目して取り上げたほうがいいのではないか。

【委員】 武蔵野市の感染者の発生時期は、明らかに6月までと7月1日以降の数字の出方が変わっているなか、市や専門家がどのようにこの状態を見ているのか。何が起きているのかというのが、実は我々としては全然分からない。そのことについて、市や専門家の方から、市民に対して何か情報発信をしているかという点を伺いたい。

【事務局】 今、委員からの指摘があった通り、武蔵野市内も100名を超える感染者数が出ている。新聞報道等でも報じられている通り、PCR検査を受けられるようになって、感染者数の数がより明確になってきたというところは、武蔵野市だけでなく、東京都全体に当てはまる。この状況を市として分析をしたことを、市民の方に周知する点は若干足りていないところもあるかもしれないが、所管の健康課も含めて、今後の施策の参考にさせていただきたい。

【委員】 実際はコロナウイルスの感染者の現在の状況を判断するのは非常に難しい。患者を受け入れている病院の先生にお伺いしても、病院の先生ごとに持たれているイメージも異なっている。軽症かどうか、それをどのように解釈していくか、難しいが、厚生労働省のホームページを見て、それで判断をするしかないと言っている。

(2) 武蔵野市独居高齢者実態調査結果の概要について【資料2】

事務局より、「資料2 武蔵野市独居高齢者実態調査報告書」について説明。

【委員長】 今回の武蔵野市独居高齢者実態調査のような調査の場合、通常では民生委員の方や専門職、ケアマネジャーの方が訪問調査を実施している。今回は郵送であったが、調査方法を変えたことによる影響というのは何か考えられるか。

【事務局】 3年に1回の民生委員の改選時に行っていた訪問調査が今回は郵送調査になった。今回調査の回収率が85.0%で、前回調査の回収率(92.1%)からやや下がっている。

調査の協力等については、前回よりも回収率が上がっていたが、新型コロナウイルスの影響を把握しきれたかどうかは、引き続き未回答調査でさらなる分析が必要と考えている。

自由回答欄に、民生委員とお話をしたいといった声もあり、やはり一定、この3年に1回の調査の中で独居の方が民生委員とのつながりを持っていたというところが改めて認識できた。もしよろしければ、民生委員さんの方からもまたお話を聞かせていただければ、事務局としても、また3年後の調査に向けて非常に参考になる。

【委員】 実際、私のところにも電話があり、担当地域の中で今回初めて調査対象に該当されるという方が、これを機会に一度お会いしたかったということだった。初めて調査対象になった方、初めて担当の民生委員になった方がいて、自分のこれからの生活に何か関わってくるということが認識されて、会いたい、もしくは名前や連絡先を知りたいというご要望があったというふうに思っている。それ以外にもやはり3年に1度、特に変わりはないが、必ず調査に行くというお宅もあるが、他方、訪問したのは1回きりでその後は一度も行っていないという方もいる。

【委員】 私も民生委員を務めており、面談を開始しようとしたまさにそのときにコロナウイルスの問題になり、予定していた面談が中止になった。コロナウイルス感染症によって、接触が出来なくなると、われわれとしては手の出しようがない。

その他、防災関係で、要援護者対策事業というのを市が実施している。つまり、災害が起きたときに自分を支援してほしい、援護してほしいと申し出る方がいて、その人に対して支援をする作業も民生委員が担当しているが、現在、やるべきことができない。会えたとしても距離をとるということになる。

【副委員長】 データの分析でお願いしたいのは、例えば、資料2の報告書本体の29ページをご覧いただくと、心配ごとなどの相談相手の有無のところに、相談相手がいない方が男性17.0%、女性4.2%で、男女の違いが明確に出る。独居老人の調査をすると、全国的な傾向と似通う。男性と女性の思考なり価値観が違うので、独居で調査をすると、男女比が明確に出る。32ページでは、介護が必要となった時の住まいの住み替えについて「特に考えていない」という回答は男性は27.1%、女性は13.1%で、男女によって違う。よって、男性に対するアプローチと女性に対するアプローチは違うので、一緒に施策は論じられず、非常に細かく分析をしていく必要がある。この概要の中ではそう触れられていないが、今後、男女比については少し着目をして分析をするべきではないか。

【委員】 今ご指摘のあった男女差の問題について、明らかに男性は、現役を離れてからの生活が難しい。結局、自分の居場所を見つけられずに、取りあえず年金で生活はできるにしても、地域の中にも入れない人がいる。そのため、地域社協という形で地域の福祉の会にたまたま関わっているが、その中でも男性向け、居住地区の比較的高齢で現役を離れた男性に向けてのメニューを考えようとしている。

【委員】 今、副委員長のほうでお話いただいた件について、資料2の32ページ、介護が必要になった時の住まいというところ、そのデータだけを見ると、現在のところずっと住み続けたいという人が多いように見られる。自分の経験上では、みんな住まいを変えたいが、家賃が高すぎて入れない、そういう声が多い。居住している住居が持ち家なのか賃貸なのかによって、分析をする必要があるのではないかな。

【委員長】 一人一人の自由記述はよほど熱心な方でないと記入しないため、そういったところは民生委員やケアマネジャーのフェースツーフェースのコミュニケーションによって意見を聞くことで、より詳細な例が出てくるのではないかな。

(3) 武蔵野市高齢者福祉計画・第8期介護保険事業計画の骨子（案）について【資料3～6】

事務局より、「資料3 武蔵野市高齢者福祉計画・第8期介護保険事業計画の骨子（案）」、「資料4 施策の体系について（イメージ案）」、「資料5 論点から導き出される個別施策（案）」、「資料6 第8期介護保険事業の基本的方向性について（案）」について説明。

【委員長】 資料3の12ページの「図表4 2025年に向けて武蔵野市が目指す“高齢者の姿とまちづくり”」で、支えとなる「高齢者を支える人材の確保・育成」は非常に重要である。それについての質問であるが、まず、今回「武蔵野市介護職・看護職Ｒｅスタート支援金」を作り、潜在的な有資格者にフォーカスを当てた。一方で、介護の仕事はやりがいがあり、最近は労働条件もかなりよくなっているということがあるので、若者に介護の仕事の魅力を発信するとよいのではないかな。例えば、ドラマや映画を活用したり、小学校の総合学習などで介護や福祉についての話をしたりする機会があることで、子どもの頃から福祉に関する仕事に関心を持ってもらえると良いのではないかな。

また、特に最近は8050問題に象徴されるように、ニーズが複雑化した、いわゆる多問題家族が非常に増えており、基幹型地域包括支援センター等で支援を行っている。次年度から社会福祉士教育が変わり、実習も複数の領域で行うこととなるなど、クロスオーバーな領域に対応できる社会福祉士が増えてくると思われる。このような専門職を採用できれば、複雑化したニーズにも対応できるのではないかな。

【事務局】 例えば現在、小中学校に向けても認知症サポーター講座を行っているが、もう少し幅を広げて、介護の仕事のアピールができればと感じている。

また、基幹型地域包括支援センターに正職員で専門職を採用できれば望ましいが、本市の人事部局の方針としては、専門職については財政援助出資団体からの派遣職員や会計年度任用職員で対応することになっている。行政職員として企画・立案の視点を持った専門職を正職員で任用したいという考えは持っているので、今後とも引き続き、人事部局とも調整しながら検討していきたい。

【委員】 小中学校以外にも、大学のインターンシップで、学生とつながるようにするとい

うことは考えているのか。

【事務局】 大学生が市役所に来て、健康福祉部でテンミリオンハウスなどの就業体験・実習をすることがある。参加者は大学で社会福祉を専攻している学生が多いと考えているが、参加のきっかけとしてテレビの影響も大きい。大学生については、今後既存の就業体験をどのように発展させるかについて、人事課とも意見交換をしていきたいと考えている。子どもたちが福祉の仕事をするものの意義を体験できるような仕組みが求められていると考えている。

【委員】 インターンシップを活用すると、うまく採用できる可能性がある。どの大学で行うのかなど、もう少し具体的に行動する必要があるのではないかと。

【事務局】 市内の大学の授業の一環で、武蔵野市の特徴的な取り組みであるテンミリオンハウスを授業のテーマに取り入れてもらったことがある。学生に福祉に興味を持ってもらうきっかけづくりになったと感じており、こうした取り組みも活用しつつ、裾野の拡大に努めていきたい。

【委員】 レモンキャブの協力員について、最近は小学生の子どもがいる母親など、年齢の若い方もいる。その子どもがレモンキャブの絵を描いて、学校で掲示されることなどを通じて、武蔵野市にレモンキャブという福祉車両があることを知ってもらう機会になっている。

若い世代のボランティアが中心となり、お祭りの会場にレモンキャブを置こうという話もあって、より多くの方に知っていただく機会があれば良いと考えている。

また、フレイルに関して、レモンキャブの利用者の中で、持病をお持ちの方や透析を受けている方は、コロナウイルス感染症で重症化しやすいため、外出がしづらくなっており、病院から自宅までの外出しかできていない。外出自粛で体力が衰え、モチベーションも下がっている中で、相談も出来ないという場合に、トレーナーを個人で雇うしかないのではないかといった状況となっている。

【副委員長】 先ほどの委員の発言に関連して、第六期長期計画の 114 ページで人材について言及している。基本施策 5 として、組織の活性化において最重要となる経営資源は人材である、市役所でもやはり職員をきちんと採用していくべきだろうという点からかなり議論をした。

これまでの地方行政職員は基本的に総合職だった。それを人事で回しながらいろいろなことを経験させていくという養成方式をとってきた。しかし、さまざまな分野が専門分化していくと、専門職の必要性が高まってくる。

ただ、医師や看護師、薬剤師等が入らなければならない特別な場合を除き、総合職の中でいかに専門性を高めていくかという視点の議論も行った。その結果、現在の長期計画の 114 ページの記載となった経緯がある。

また、新型コロナウイルスは従来なかったものであるため、注意が向けられがち

であるが、新型コロナウイルス以外にも危険はある。平成 30 年のデータでは、熱中症の死者数は全国で 1,581 人、うち 1,288 人が 65 歳以上、実に 81.5 パーセントがお年寄りである。また、新型インフルエンザの死亡率は、新型コロナウイルスの死亡率より高い。

熱中症のようにデータが明らかなものは非常に対応しやすく、高齢者に対して、熱中症予防のため外出を控えるように言うことができるが、新型コロナウイルスの場合には、まだはっきりとしたデータが出ていない。そのような中で、高齢者施設をロックダウンしたことで、医療崩壊につながらなかったことは明らかである。ただ、それをいつまで続けるのかという問題があり、ここには経営、フレイル、利用者や家族のストレスの問題が絡んでいる。薬もワクチンもできていないという現状は、新型コロナウイルスが発生してから何も状況は変わっていない。

したがって、本計画については、熱中症、新型インフルエンザ、新型コロナウイルスを含む多方面の対応を念頭において文言を検討すべきではないか。

また、資料 3 の 29 ページで、引きこもりについて言及されている。従来の引きこもりは、長期間自宅などから出られず自宅外での生活の場がない状態を指している。しかし、昨今の引きこもりは状況が変わってきており、従来のひきこもりに加えて、会社の雇用がストップして就業できず、外出したくても出来ない方が増えている。これは従来の福祉施策の対象者ではなく、必ずしも精神保健的なアプローチを必要としている訳でもないので、従来施策では救いきれない。現場ではこのような問題も発生しており、どのようにアプローチするかが重要ではないか。

資料 3 の 30 ページも同様で、ひとり暮らしのところで、例えば高齢者と障害者の世帯や、高齢者の夫婦のみ世帯であっても実態としてはもう独居と変わらないような世帯、子どもとも暮らしているが、子どもが仕事のため実際は独居状態の高齢者といった方々の支援が必要になってきているのではないか。

【委員】 リーマンショック前は深刻な人手不足で、介護職を募集しても全く応募がなかった。しかしながら、リーマンショックが来た途端に、介護職員の志望者が殺到した。コロナウイルス感染拡大の前はやはり人手不足であったが、2020 年 3 月から状況が変わり、飲食店、ホテル業界など様々な業界から問い合わせがあり、求人については比較的安心できる状況にもなりつつある。ただ、景気に影響されて就職した方は、その後定着しないケースもある。

他方、長年介護職を続けていた方が、コロナウイルスを危惧して離職するケースが出てきている。武蔵野市の介護職の方は大体 10 年・20 年と、長年働いてきた方が非常に多く、高齢化している。ただ、介護の仕事に対してやりがいを感じている方が多いので、武蔵野市で就業を継続する際のメリットを提案していただきたい。既に表彰をしているが、それ以外に、60 代・70 代になった職員たちを励まして、もう 1 年、もう 1 年と長く続けていただける仕組みを作っていただきたい。

【委員】 介護について、小学生に向けて仕事の中身を紹介するというアプローチがあり、それを大学生にもやったらよいのではないか。武蔵野市の場合、特に吉祥寺方面は

東京の中でも都会的で、23区よりも下町的なつながりがない地域という印象がある。最近、高齢者と子どもが交流できるような構造の施設も増えている中、特殊ではあるが、文京区で大学生を安い家賃で一戸建に下宿させ、高齢者の見守りをしてもらう取組みも出てきている。武蔵野市も一戸建ての所有者が多く、かつ独居高齢者、高齢者のみ世帯が多いので、空室がたくさんある。若者と高齢者が一緒に暮らすという取組みも良いのではないかな。

また、私はケアマネジャーになる前、全く別の業界にいた。なぜ武蔵野市で働き始めたかというところ武蔵野市は非常に情報伝達が早く、優れたケアマネジャーの教育システムがあり、他の自治体に比べても大変恵まれた環境で学ぶことができたからである。武蔵野市のこうした取組みのアピールをしていくべきではないかな。

【委員】 若年者を対象に、先ほどの介護職・看護職Ｒｅスタート支援を行うことや、小学生、中学生に教育していくことは非常に重要なことだと思うが、実際に介護をされるということを身近に感じられるのは、介護を受けられる同年代か、ちょっと高い世代の方ではないかな。別の自治体でみられるように、例えばポイント制を導入し、ボランティア等で貯めたポイントを自分が介護を必要とするようになったら使うことができるといった取組みを、武蔵野市は検討しているのか伺いたい。

【事務局】 武蔵野市では、シニア支え合いポイントという、65歳以上の方が地域活動、例えば施設で高齢者の話し相手になる、見守りをするといった活動をした場合にポイントが付与され、それが貯まると年度ごとにクオカードや地域の野菜券などに交換できる制度がある。武蔵野市は、以前からボランティア活動に積極的な地域ではあるが、さらにそこを発展させようという目的が一つと、こうした社会活動が介護予防につながるところがあるため、あえて制度として位置付けた。これまで介護に接したことのない方もいるが、そのような方が介護の世界に興味を持って、少し関わるようになってくださることもあるのではないかと考えている。

【事務局】 10年以上長く働いている方についてはケアリンピックで表彰している。もっとこういったものがあると、より皆さんの前向きな気持ちに繋がるものがあれば、また事務局のほうにもご提案いただき、こちらも参考にさせていただきたい。

3 その他

(次回以降の日程について)

第5回 日時：10月28日（水）午後6時30分～、場所：武蔵野市役所 601 会議室

4 閉会

以上